

氷点

(2)

三浦綾子



角川文庫 5025

ひょうてん
氷点

(上)

みうらあやこ
三浦綾子



角川文庫 5025

昭和五十七年一月三十日 初版発行
昭和六十年一月三十日 七版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

編集部(〇三)二三八—八四五—
電話

営業部(〇三)二三八—八五二—

千一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——旭印刷 製本所——大谷製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

ISBN4-04-143703-2 C0193

氷点

(上)

三浦綾子



角川文庫 3029

目次

敵	誘拐	ルリ子の死	灯影	西日	線香花火	チョコレート	雨のあと	回転椅子	九月の風	ゆらぎ	どろぐつ	みずうみ	雪けむり

二〇	二九	一七	一五	二五	二三	二〇	一八	一六	一四	一三	一五
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

つぶて
激流
橋
青い炎
白い服
よそおい
歩調
台風

三七 三六 三六 三七 二六 二四 三六 三七

敵

風は全くない。東の空に入道雲が、高く陽に輝やいて、つくりつけたように動かない。ストロ
ーブ松の林の影が、くつきりと地に濃く短かった。その影が生あるもののように、くろぐろと
不気味に息づいて見える。

旭川市郊外、神楽町のこの松林のすぐ傍らに、和、洋館から成る辻口病院長邸が、ひっそりと
建っていた。近所には、かぞえるほどの家もない。

遠くで祭りの五段雷が鳴った。昭和二十一年七月二十一日、夏祭りのひる下りである。

辻口家の応接室に、辻口啓造の妻、夏枝と、辻口病院の眼科医村井靖夫が、先程から沈黙のま
ま、向いあって椅子に座っている。座っているだけでも、じとじとと汗ばんで来るような暑さで
あった。

突然、村井は無言のまま立ち上ると、大股にドアのところまで行って取手に手をかけた。
取手が、ガチャリと音を立てた。長い沈黙の中で、その音が夏枝には、ひどく大きく響いた。

夏枝は思わず目を上げた。つややかな瞳に、長いまつげが影を落している。とおった鼻筋に氣
品があった。紺地の浴衣に、雪国の女性らしい、肌理こまかい色白の顔がよく映えている。

(さっきから、黙ってばかり……)

そう思いながら、夏枝は背を向けたまま立っている村井の、長身の白い背広姿を見上げて微笑した。つましやかな、整った夏枝の唇が、ほほえむと意外に肉感的に見える。それは二十六歳の若さの故ばかりではなかった。

先程から、村井が何を言いたがっているかに夏枝は気づいている。夏枝は、その言葉を待つ表情になった。そのような自分を意識しながら、旅行中の夫、啓造のやや神経質だが優しい目を、ふと思い出していた。

今年の二月であった。夏枝は、ストーブの灰を捨てる時、灰が目に入って村井に診てもらった。その時以来、村井は夏枝から心をそらすことが、できなくなっていた。

無論それまで、院長夫人である夏枝を知らない訳ではない。しかし夏枝には、まともに顔を合わすこともできないような、関心を持つことすら憚られるような犯しがたい美しさがあった。

その夏枝が彼の患者となったのである。手術台の上の、夏枝の角膜につきささっている微細な炭塵^{たんじん}をとりのぞき、眼帯をかけ終ると、村井はかつてないふしぎな喜びを感じた。

「これですね、犯人は」

村井は夏枝に、ピンセットの先の小さな炭塵を見せた。

「見えませんわ。あまり小さくて」

手術台の上に片手をついた姿勢で、夏枝は小首をかしげて微笑した。

「これなら、見えますでしょう」

村井は白いちり紙に、ピンセットをなすりつけるようにして炭塵を移した。それを見る二人の

頬がふれ合わんばかりに近いのを、村井は意識していた。

「まあ、こんなに小さいんですの。あんまり痛いものですから、どんな大きなゴミかと思いましたわ」

眼帯をかけて片目になった夏枝は、遠近が定まらなかった。定まらないままに、彼女はじつとゴミをみつめていた。二人の頬を寄せ合う時間が、少し長かった。

それから半月程、夏枝は通院した。彼女の目がかなりよくなって、治療の必要がなくなっても、村井はだまって洗眼した。

「もうよろしゅうございますか」

ある日、夏枝がたずねると、村井は哀願するようなまなざしをした。

「もう一度、暗室でよく診なければ……」

少し声がかすれた。

暗室はせまかった。向き合って椅子に座っている二人の膝が触れた。診る必要はなかった。だが彼は、ゆっくりと時間をかけて診察した。

終ると村井は、食い入るように夏枝をみつめた。その真剣な目のいろに、夏枝はたじろいだ。

同時に、胸の中にキュッと押しこんで来る、ふしぎに快い感情があった。だが夏枝は表情を変えなかった。

「ありがとうございました」

立ち上る夏枝の手を村井がつかんだ。

「行かないでください」

子供っぽい言い方がかわいいと思った。夏枝は、つましく目をふせると、村井の手をそっとはずして暗室を出た。

それから村井は、時々辻口家を訪ねるようになった。しかし辻口家の幼い徹とルリ子に対しては、あまり言葉をかけなかった。

「村井さんは、子供がおきらしいですわね」

ある時、夏枝が言った。啓造がちょうどその場を、何かの用ではずした時だった。

「子供がきらいというんでは、ないのですが……」

村井はちよつと皮肉に唇をゆがめた。冷たい、ニヒリスチックな表情であった。

「でも奥さんの子は嫌いだな。嫌いというより呪^{のろ}いたい存在と言いますかね」

「まあ！ 呪うなんて……そんな……」

「奥さんは、子供なんて産んでほしくなかった」

村井の慕情の激しさに、夏枝は感動した。

今、ドアの前に立っている村井の後姿を見ながら、一か月ほど前の、その村井の言葉を夏枝は思い出していた。

遠くで再び祭りの五段雷が鳴った。

取手に手をかけたまま、村井がふり返った。その広い額がじつとりと汗にぬれている。やや、うすい唇が、もの言いたげにかすかに動いた。

夏枝は村井の言葉を待った。

その言葉を待つと言うことが、人妻の彼女にとって、どんなことなのか今は、夏枝は気づきたくなかった。

「どうして、ぼくに結婚なんか、すすめるんです？」

村井のたたきつけるような激しい語調に、長い沈黙が破られると、夏枝はかるいめまいをおぼえて、傍らのスタンドピアノによりかかった。

「奥さん！」

村井はピアノに寄りかかっている夏枝に近づいた。夏枝は、すばやく椅子から立ち上ると、うしろへ退いた。

「奥さん、あなたは残酷な方だ」

村井は夏枝の前に立ちはだかるように迫った。

「残酷ですって？」

「そうですよ。残酷ですよ。あなたは、さきほど、ぼくに縁談を持ち出したじゃありませんか。ぼくは、あなたがわかっていくださるとばかり思っていた。ずっと以前から、ぼくの気持がよくわかっていらっしゃったはずだ。それなのにあなたは……」

村井はテーブルの上の写真を見た。夏枝がすすめた写真の女性は、笑声が聞えそうなほど無邪気な笑顔で、アカシヤの樹によりかかって写っている。

村井は視線を夏枝の上にもどした。男にしては美しすぎる黒い瞳であった。その目が、時々ど

うかすると虚無的に暗くかげることがあった。その暗いかげりに夏枝はひかれるものを感じた。今、村井はややすさんだ暗い目で夏枝をみつめている。夏枝はその村井の胸に倒れこみそうな自分を感じて目をふせた。

こんなふうに明らさまな口説くづをきく日が、いつか来るように夏枝は思っていた。

今日縁談を持ち出したのも、村井に結婚をすすめるためではなく、夏枝に対する関心がほんとうのところ、どの程度のものかを、はっきり知りたいためかも知れなかった。

夏枝は、よくしなう美しい手を合わせて、拝むように胸のあたりに持って来た。そのしぐさが、ひどくなまめいて見えた。

「夏枝さん」

白いしっくいしの壁を背にした夏枝の前に立ちふさがると、村井は夏枝の肩に手を置いた。村井の手のぬくみが、浴衣を通して夏枝の体に伝わった。

「いけません。怒りますわ、わたくし……」

村井の顔が覆うように夏枝に迫った。

「村井さん、わたくしが辻口の妻であることを、お忘れにならないでください」

夏枝の顔が青かった。

「夏枝さん、それが忘れられるものなら……ぼくはそれを忘れない！ 忘れられないからこそ、今までぼくは苦しんで来たじゃありませんか」

村井の手が夏枝の肩を激しく揺さぶった、その時であった。廊下に足音がして、ドアが開いた。

ピンクの服に白いエプロンをかけたルリ子が、チョコチョコと入って来た。

村井はあわてて、二、三步夏枝から離れた。

「おかあちゃま、どうしたの？」

三歳のルリ子にも、大人二人の様子にただならぬものを感じとったらしく、いっばいに見ひらいた目で村井をにらんだ。

「おかあちゃまをいじめたら、おとうちゃまにいつてやるから！」

ルリ子はそういつて小さな手をひろげて、母をかばうように夏枝のそばにかけよった。

村井と夏枝は思わず顔を見合わせた。

「そうじゃないのよ、ルリ子ちゃん。おかあちゃまはね、先生と大切なお話があるのよ。おりこうだから、外で遊んでいらっしやいね」

夏枝は小腰をかがめ、ルリ子の両手を握って軽く振った。

「イヤよ。ルリ子、村井センセきらい！」

ルリ子は村井を真っすぐに見上げた。子供らしい無遠慮な凝視だった。村井は思わず顔をあからめて夏枝をみた。

「ルリ子ちゃん！ いけません、そんなことをいつて。村井先生は、おかあちゃまと大事なお話があるといつたでしょ？ おりこうさんね、よし子ちゃんのお家へ行つて遊んでいらっしやい」

夏枝は村井よりもいつそう顔をあからめてルリ子の頭をなでた。

もし、村井の愛を拒むなら、今ルリ子をひざに抱きあげるべきだと夏枝は思った。しかしそれができなかった。

「センセきらい！ おかあちゃまもきらい！ だれもルリ子と遊んでくれない」
ルリ子はくると背を向けて応接室を飛び出して行った。エプロンの蝶結びちようむすが背中に可憐に揺れた。

夏枝はよほど呼びとめようかと思った。しかし今しばらく村井と二人きりでいたい思いには勝てなかった。

廊下を走るかわいい足音が勝手口に去った。何か心に残る足音だった。

「ごめんなさい、ルリ子が失礼なことを申しあげまして……」

ルリ子の出現が二人を近づけた。

「いや、子供って正直ですね。そして恐ろしいほど敏感なものですね」

村井は、立ったまま煙草に火をつけながらいった。

「あなたはうづの子をおきらいでしたものね」

「きらいというのは、ちょっとちがうんです。徹くんにしろ、ルリ子ちゃんにしろ、何かこう神経質な感じや、はれぼったいような眼なんか、院長そっくりじゃありませんか。ぼくは院長と夏枝さんの子供だという、その事実には耐えられないんです。見るのも辛いことさえある」

村井は煙草を灰皿に捨てると、両手を深くズボンのポケットに入れたまま、熱っぽく夏枝をみつめた。

二人の視線がからみ合った。

夏枝が先に視線をそらした。彼女は静かにピアノの前に座ってふたを開いた。何を弾くというのでもなかった。両手を軽くピアノの上に置いたまま夏枝はいった。

「お帰りになって頂けません？」

声が少しふるえた。夫も、女中の次子も、ルリ子もないこの家の中で、何かが起るのを彼女は感じた。夏枝の体の中に、その何かを期待するものがあった。その自分が恐ろしかった。

夏枝の言葉を聞くと、村井は片頬に微笑を浮べて、ピアノの前に座っている彼女のうしろに立った。

「夏枝さん」

彼はうしろから、ピアノの鍵盤けんばんにおかれた夏枝の白い両手を上からおさえた。ピアノが大きく鳴り響いた。

思わずふり向いた夏枝の頬に、村井の唇が触れた。

「いけません」

心とは反対の言葉だった。村井は無言で夏枝の肩を抱いた。

「いけません」

村井の唇をさけて、夏枝はあごを深く衿えりにうずめた。唇だけは避けなければ、そのあとの自分に自信がなかった。

「いけません」

夏枝の頬を上に向かせようとしている村井に三度拒むと、村井は身をかがめて夏枝の頬に唇をふれようとした。彼女はかたくなに身をよじって村井をさけた。村井の唇は夏枝の頬をかすめただけであつた。

「わかりました。そんなにぼくをきらっていられたのですか」

村井は夏枝の拒絶にはずかしめられた思いで、さっとドアを開けて玄關に出た。

夏枝は呆然として立ち上った。

(きらいなのじゃない)

拒絶は媚態であり、遊びであつた。次に来るものをいつの間にか夏枝は待っていたのだった。

二十八歳の村井にはそれがわからなかつたのだ。

夏枝は村井を送りに出なかつた。引きとめてしまいそうな自分が恐ろしかった。

村井の唇がふれた頬に、そっと手を当てた。その部分が宝石のように貴重に思えた。胸をしめつけるような甘美な感情があつた。結婚して六年、夫以外の男性にはじめて口づけを頬に受けたことが、夏枝の感情をたかぶらせた。

夏枝は再びピアノの前に座つた。キイの上を白い指が走つた。ショパンの幻想即興曲であつた。次第に感情が激して来た。夏枝は長いまつ毛をとじたまま酔つたようにピアノを弾きつづけた。

ちょうど、このころ幼いルリ子の上に何が起きていたかを、夏枝は知る由もなかつた。

突然ピアノ線が鋭い音を立てて切れた。不吉な感じだった。

はっとした瞬間、

「ピアノ線が切れるまで弾くとは、またずいぶん御熱心なことだね」
いつの間にか夫の啓造が、いつものように優しい笑顔でうしろに立っていた。

「あら！ 今日でしたの」

夏枝は狼狽した。啓造の帰宅は明日の予定であった。ぽっと頬をあからめて立ち上った姿がなまめいた。それが啓造には、夫の突然の帰宅を喜ぶ姿に思われた。

「だまって立っていらっしゃるんですもの、いやなかつた！」

夏枝は啓造のくびに、その白いむっちりした両腕をからませて彼の胸に顔をうずめた。

今の今まで、村井靖夫を思つて上気した自分の顔を、夏枝は見られなくなつたからである。

啓造はふと、いつもとちがつたものを夏枝に感じた。今までの夏枝は、自分から啓造のくびを抱くというようなことはなかつた。

「暑いよ」

そういいながらも、しかし啓造は夏枝の背に腕をまわした。

啓造は学者肌で、神経質だがとげとげしいところが少なかった。もの静かで優しい夫であった。信頼できる夫だった。

夏枝は、夫の胸に顔をうずめながら、心が次第に安らかになっていった。先ほどの妖しく波だつた村井への感情が、今はふしぎだった。嘘のようでもあった。

（やっぱり辻口が一番いいわ）

そう思った。夏枝は啓造を愛している。医者としても夫としても尊敬していた。何の不満もな